

(仮称) 若穂スマートIC整備事業に伴う発掘調査

かわだじょうり

川田条里遺跡 発掘調査現場公開 資料

令和8(2026)年7月1日(水)・7月2日(木)
(一財) 長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

《川田条里遺跡ってどんな遺跡?》



調査区遠景 (東より) ★ 今年度調査地

川田条里遺跡は、千曲川右岸の^{こうはいしつち}後背湿地上に位置する遺跡です。

これまでに、1989～1990(平成元～2)年に長野県埋蔵文化財センターが上信越道建設事業に伴い 発掘調査を実施し、弥生時代中期から近世まで各時期の水田跡が重なっていることを確認しました(①)。また、川田条里遺跡範囲内の川田小学校周辺には、中世の居館跡である川田氏館跡^{かわだしやかたあと}の存在が指摘されていて、1999(平成11)年に長野市教育委員会が、川田小学校に隣接する川田保育園(現認定こども園川田)の改築工事に伴い発掘調査を実施し、室町時代(15世紀後半)の館跡に関する工作遺構を発見しました(②)。

現在は、(仮称)若穂スマートIC整備事業に伴う発掘調査を2023(令和5)年、2025年(令和7)年に長野県埋蔵文化財センターが行っていて、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構が確認されています(③・④)。特に、今回の調査地の南側で実施された昨年度の調査では、掘立柱建物跡や中世遺構範囲の南限を示す溝跡等と共に、鍛冶炉等の工作に関連する遺構が検出されています。工作に関連する要素は、今年度の調査地点でも確認されており、過去に調査が行われた川田保育園地点も含めて、この周囲に中世居館に関わる工作空間がひろがっていた様子が明らかになりつつあります。

今年度の調査成果：遺物編(中世a面)

時代を示す遺物

これらの遺物は、室町時代頃に登場する遺物で、遺構等の時代推定に役立ちました。

①は「内耳鍋」と呼ばれる土器で、鉄鍋と同じように^{ないじなべ}囲炉裏等の上に吊り下げるために、内側^{いろうり}に把手(耳)^{とって}を持ち、煮炊きに使用されていたと考えられます。

②は「かわらけ」と呼ばれる素焼きの皿で、宴会等の場で使用されたと考えられています。時代や地域により作り方が異なり、本遺跡で出土したものは「ろくろ」で作られ、底部に糸切りによる切り離しの痕跡が見られるので、室町時代頃に作られたものと考えられます。



鍛冶に関わる遺物

今回の調査では、昨年度の調査と同様に鍛冶^{かじ}などの工作に関わる遺物が出土しています。

③は「鉄滓」と呼ばれる遺物で、鉄の原料を生成したり、純度を高める作業を行う際に排出される鉄くずです。調査地周辺では鉄の原料に関わる作業も行われていたようです。

④は「ふいごの羽口」と呼ばれる遺物で、鍛冶炉へ空気を送り込むために使用される土製送風管です。本個体は管の孔の一部が残っています。

⑤は「るつぼ」と呼ばれる遺物で、^{ちゅうぞう}鑄造を行う際に溶けた金属を入れる容器です。本個体は容器の底部付近の破片ですが、表面には被熱による発泡の痕跡が確認できます。



今年度の調査成果：遺構編

鎌倉時代から室町時代

地表面から50cm以下に3面の中世面が確認され、それぞれの遺構面で溝や穴などの遺構が多数確認されています。鍛冶に
関連する遺物や、炭が多く含まれる穴なども確認されており、
周囲に中世居館に関連する工作空間がひろがっていたようです。
年代は、出土した遺物の様相から第1面(中世a面)を15世紀後半～16世紀頃、第2面(中世b面)を14～15世紀頃、第3面(中世C面)を13世紀頃と推測しています。

奈良時代以前

調査区に設置された試掘溝では、中世面のさらに下層で水田の畦畔に伴うものと考えられる杭跡や、ウマの頭の骨や歯などが確認されています。

今後、この水田面の調査を実施する予定となっています。

①土坑群

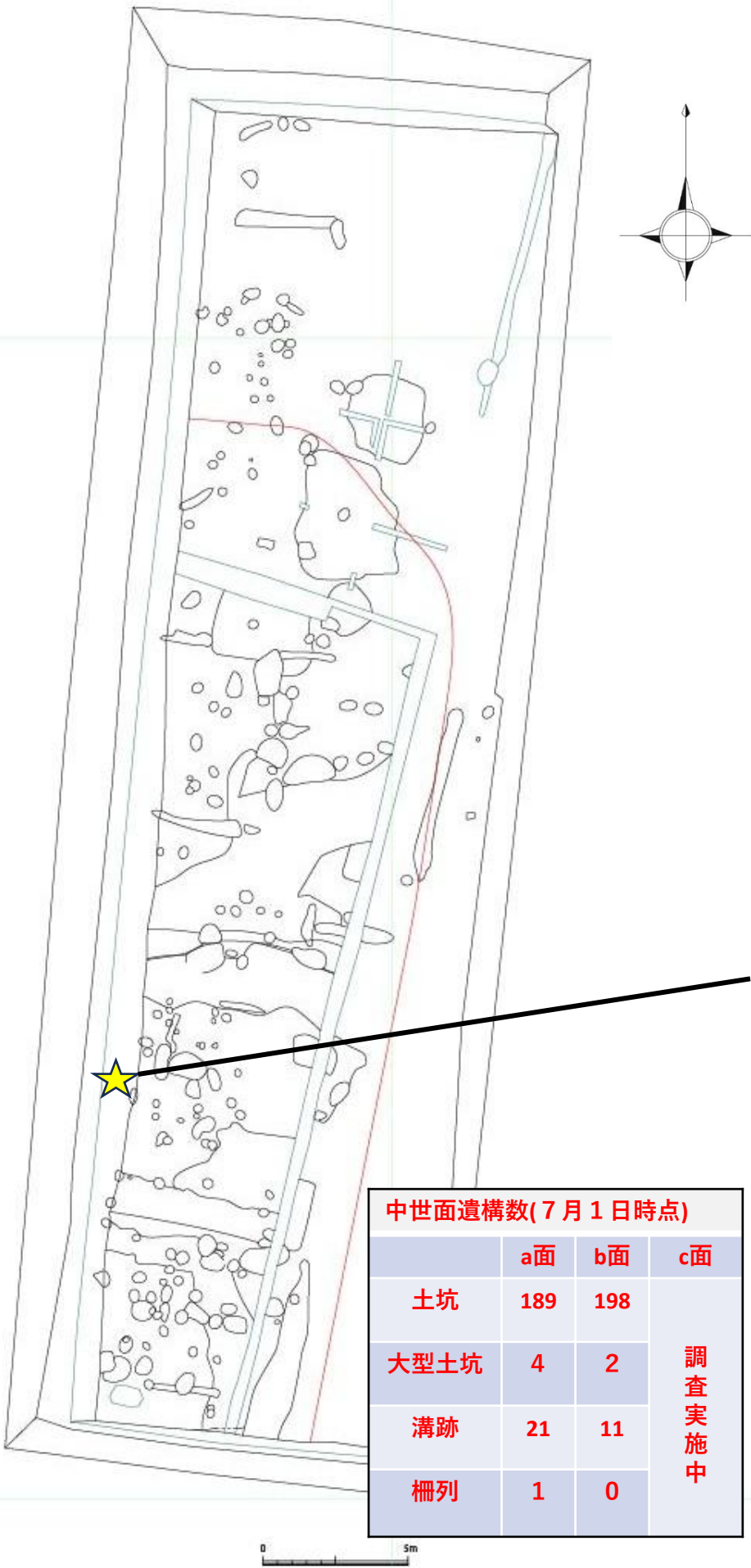
中世からは、柱を立てて建てられる掘立柱建物が主流となるため、中世の遺跡では小さい穴が多く検出されます。今回の調査では、300を超える穴が検出され、一部の穴では、杭や柱の木材が残存しているものもありました。



柱・杭の木材が残る穴



炭が堆積する穴



中世a面(15世紀後半～16世紀初頭)遺構図

②鎌倉時代から室町時代の生活面

壁面の確認の結果、調査地には少なくとも3面にわたる中世面(中世a～c面)が存在することが分かっています。当地では13世紀から16世紀頃にかけて一定期間の人の営みがあったようです。



近現代堆積層

近世水田層

中世a面

中世b面

中世c面

平安時代頃の堆積層

奈良時代の泥炭層

奈良時代以前の水田層

調査区北壁壁面

☆トピックス：ウマの頭

土の堆積の確認を行うために掘削を行った試掘溝から、奈良時代前後のものと考えられるウマの頭部の骨・歯が出土しました。歯は上下の歯が組み合わさった状態で確認されましたが、周囲に首や胴体などの骨が確認されなかったため、ウマの頭部のみが埋められていたものと考えられます。周囲の土層の観察により、この場所には水田の畦畔があったものと推測され、水田畦畔上でウマの頭部を用いたなにかしらのおまじないが行われた可能性が考えられます。



ウマの骨・歯